

僕は彼に言った。

「君の為ならいいよ」

僕は満面の笑みで答えた。

どんな材料が必要なの？

と、彼は聞いてきた。

「肉が必要だよ」

と、僕は答えた。

どんな肉？

「君のお姉さんが好きだった人の肉なんかいんじゃないかな？」

わかった。持ってくるよ。

彼は鼻息を荒くして、目をキラキラさせて出かけて行った。

彼は、

僕の伯父にあたる。

お母さんの弟だ。

けれど、伯父は大の大人のくせに大人ではなかった。

彼は僕のことを甥だとは思ってはいなかった。

親しい友人だと思っていた。

心だか、脳みそだかに病気を抱えている彼は、ずっと子供のままでいられるらしい。それを周りの大人たちは認められているらしい。

ずっと、子供として扱われ続け、

自らも子供であると信じ続けている、

血縁関係のある、

醜い中年男が、

僕に向かって

「君は一番の友達だね」

と、言う。言ってくる。朗らかな笑顔で。

ああ、なんて純粹無垢な愚か者。  
下らない、くだらない、愚か者。

お母さんは死んだじゃないか。  
首をくくって死んだじゃないか。

ああ、僕の大好きなお母さん。  
優しい顔。

ベージュ色の素敵な香り。ビーフシチューの匂い。  
優しい声。

僕の大好きなお母さん。

お母さんはお骨になった。もう、帰ってこない。  
もう、死んでしまったのだから。

だのに、ああ、お父さんは生きていた。

宙ぶらりんになったお母さんを見つけた時、

お父さんは死んでしまえばいいと思った。

お父さんが殺した。

お母さんをお父さんが殺した。

お父さんは僕がまだ子供だと思っている。

思っているから、担任の先生と旅行に行っていたことの意味を僕が理解していないと思っ  
ている。

ああ、ああ、

お父さんもなんて愚かなんだろうか。

お父さんは殺してやる。

お父さんを殺してやる。

そうして今、目の前にお父さんの首がある。

お父さん、よく死にました。

よく死んでくれました。

愚か者の伯父に殺されたお父さん。

純粹無垢な僕の友達のキラキラした瞳の中年男の  
伯父に、殺された。

彼は彼なりに努力をしたのだ。

彼は彼の純粹無垢な正義感のもと、愚かな父を殺してくれた。

カナタ、

と、伯父は僕を呼ぶ。

まるで神様を見るような目で、伯父は僕を見る。

何かを懇願するかのようなその目はひどい、ひどい嫌悪感を感じた。

カナタ、

姉さんはこれで僕のところに帰ってきてくれるんだよね？

・・・ああ、気色が悪い。

ダメだ。

と、僕は言った。

もっと、必要みたいだ。

と、僕が言ったら、彼は目の色を変えて元気よくうなずいた。

わかった！

みんなをここに連れてくるよ！！

伯父は散々に、

殺して回った。

毎日毎日、僕の目の前に、僕の家族の首が並んでいく。

毎日毎日、僕の目の前に、僕の親戚の首が並んでいく。

毎日毎日、僕の目の前に、首が並んでいく。

伯父は泣いていた。

血だらけになって、泣いていた。

姉さんに会えないんだ。

と、泣いていた。

僕も泣いていた。

お母さんに会うことはできないんだと、泣いていた。

血だらけになりながら、僕と伯父は泣いていた。

ある日、伯父は僕に向かって、言った。

『カナタはどうして約束してくれたのに、姉さんに会わせてくれないの？

カナタは姉さんに似ているね。カナタは姉さんなの？

姉さんになったの？　ねえ、カナタ、姉さんに会わせて。

それとも、カナタは姉さんなの？

ねえ、姉さんなの！？

なんで、僕に会いに来てくれないの！？』

伯父は、僕の首に手をかけて、僕を締め上げた。

姉さんに会いたいよ。

姉さんに会いたいよ。

姉さんに会いたいよ。

と、伯父は叫んでいた。

僕だって、お母さんに会いたいよ。

お母さん、また会えるかな？

僕の首が、

ぐきりと折れて、

伯父の汚い涙が、

僕の頬に、

落ちた。